

【目的】 我々は前報¹⁾でテルペノイドの羊毛への吸着性をインバースガスクロマト法によって測定し、その保持容量がテルペノイドの末端官能基の影響を受けることを示唆した。本報告では、このテルペノイドを官能検査によって評価し、吸着量との相関を検討した。

【方法】 官能検査は、20代の女性9人を被験者とし、10種のテルペノイドを用いて行った。におい物質は内径30mm高さ80mmの容器に入れ、自由に吸入させた。宮崎らの21の香りの形容語対を用い、SD評価法により、7段階尺度で判定した。7段階尺度に1点から7点を与えて数値化し、その平均値を用い、因子分析（主因子法、バリマックス回転）により基本因子を抽出した。吸着実験は、インバースガスクロマトグラフ法で行った。固定相として羊毛糸を、プローブとしてテルペノイドを用いて、その吸着性を測定した。

【結果】 不快感（因子寄与率65.4%）をはじめ、4つの因子が抽出された。4因子の累積寄与率は総合で84.1%であった。不快感は樹脂及びパイン様香気の α -ピネンや甘いバルサム様の香りのミルセンの吸入によって強く感じられ、同じテルペン炭化水素であってもオレンジ様香気のリモネンでは逆に、さわやかに感じられている。

吸着性はクロマトグラム上の保持容量とピークの形等で検討し、ベリラアルデヒドやシトロネロールなどは、羊毛と親和性があり、ミルセンやリモネンなどは親和性がないことが推測された。